

# 新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う 日本語教育プログラムの対応

— 2020 年度の立教大学日本語教育センターの取り組み —

## Japanese Language Programs in Response to the COVID-19 Pandemic: Efforts by the Center for Japanese Language Education, Rikkyo University in AY 2020

藤田恵、数野恵理、金庭久美子、任ジェヒ  
FUJITA Megumi, KAZUNO Eri, KANENIWA Kumiko, YIM Jaehee  
小林友美、小松満帆、池田伸子、丸山千歌  
KOBAYASHI Tomomi, KOMATSU Maho, IKEDA Nobuko, MARUYAMA Chika

### 〔要旨〕

立教大学日本語教育センター（CJLE）では、新型コロナウイルス感染症の影響下において、日本への入国制限や本学の授業実施体制の方針に合わせて、運営方針を切り替え、様々な対応を行ってきた。日本語レベル判定テスト中止の方向での学内での調整をはじめとし、日本語クラスの運営についてあらゆる側面で最善策を検討し、実施してきた。本稿では、その取り組みを整理し、その成果について報告するものとする。CJLE では、大学と連携し、打ち合わせを重ね、教材の開発、クラス運営形態の変更、クイズやテストの新たな実施方法の開発等、迅速かつ細やかな対応を行ってきたが、その結果、得られた多くの経験と知見、高い成果を記録することで、今後、類似の対応が求められる事態に陥った場合にも活用できる参照情報として残すことを目的としている。

**Key word:** オンライン授業、日本語教育、コースデザイン、教室活動、  
新型コロナウイルス感染症



## 1. はじめに

2020年は世界中が新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）拡大の影響を大きく受けた年であった。新型コロナのニュースは2020年に入ってまもなく世界を席捲し、立教大学では2月末には卒業式の中止が、3月初旬には2020年度入学式の中止が決まり、4月初めには2020年度春学期の授業実施体制の一斉オンライン化と授業開始日の繰り下げが発表された（立教大学、2020a）。また、3月下旬に差し掛かるころには日本への入国制限が始まり、春に入学予定であったり、春休みで一時帰国中であつたりした留学生の多くが入国できない状況となった（在香港日本領事館、2020）。

立教大学日本語教育センター（以下、CJLE）は、本学の正規留学生や特別外国人学生等の留学生を対象に日本語科目を提供しており、3月は、新学期開始前に新規受け入れの留学生対象の日本語プレイスメントテスト（以下、PT）を実施する時期であり、また4月からの授業準備をする時期でもある。

日本への入国制限や本学の授業実施体制の方針に合わせて、CJLEも運営方針を切り替え、PT中止の方向で学内での調整を進め、日本語クラスのデザインを検討し、対応を進めることとなった。このような社会状況の大きな変化に伴う授業実施体制の変更への対応は、多間に漏れずCJLEにとっても初めての試みとなったが、今回の取り組みを記録しておくことは、今後、類似の対応が必要となった際、本取り組みを参照情報として活用し、今回よりもさらにより取り組みにつなげるために有用である。そこで、本稿では、今回の一連の取り組みを整理する。

## 2. オンライン授業の取り組みの概要

春学期の授業のオンライン化が決まった段階で、本学では大学HPに学生向け、そして教員向けに「立教大学オンライン授業マニュアル」のページが設けられ、オンライン授業のための講習会も開催された（立教大学、2020b）。また前掲のサイト上の教員向けマニュアルは、年度を通じて適宜必要な情報が更新されていった。CJLEは、こういった大学が発信する情報を踏まえて対応していくことになるが、具体的な取り組みを開始する前にCJLE内で方向性を確認、共有していったのは、①授業形態、②授業運営、③コンテンツ、④その他である。

まず、①の授業形態については、大学から一方向スタイルと双方向スタイルがあることが示されたが、日本語科目については、語学の授業運営の特徴をオンライン授業でも生かしていきたいという考えから、双方向スタイルを基本とすることとした。②授業運営については、次節以降で詳述するが、3月の時点で大学から注意喚起がされていたのは、オンライン授業の導入が急であるために、学生側も教員側もインターネット環境が十分でない可能性があり、その点を考慮する必要があるということであった。具体的にはWi-Fi環境が十分でない学生、カメラ、マイクが用意できない学生がいる可能性が高いということ、また授業中のインターネットトラブルに対応す

る用意も必要だということで、これらの点への対応が対策の視野に入っていた。

②の授業運営については、日本語クラスの特性を生かすことを軸に検討が進められた。これらは方針、方法、評価の3点で整理できる。方針については、日本語科目を履修する留学生は、正規留学生でも特別外国人学生でも入学間もない学生が履修するケースが多いことから、留学生にとって日本語科目が大切な居場所になっているという認識がセンター教員で共有されていたので、オンライン授業の場合でも、日本語科目が学習の場であると同時に、交流の場にもなるような運営を行うという方針が共有された。方法については、対面授業と同様にインタラクティブな授業運営と学習成果を目指すと同時に、オンライン授業でどのように学生の声を受け取っていくかが課題であるという認識のもと検討が進められた。また、評価については、宿題、クイズ、テストの実施と評価方法の検討が必要となった。

③のコンテンツは、主に著作権の対応が課題となった。これは、オンライン授業の導入が決まった時点で、大学から、対面授業の授業内で紙媒体により資料を配付するときとオンライン上で資料を配付するときとは著作権の扱いが異なるため注意するようという注意喚起に基づく対応である。科目コーディネーターを中心に各科目で使用している市販教材を整理し、CJLEとして出版社への連絡、許諾申請を行った。また、必要に応じて、教材を新しく作成して新学期に臨むようにした。

④のその他は、主に同僚教師の状況と履修学生の状況を理解するという態度についてである。まず、同僚教師については、新学期の開始が約1か月遅れたとはいえ、これまで対面授業を前提に計画していた科目を全てオンライン授業用に整える仕事には時間的制約が大きな条件になると考えること、PC操作が得意でない教員も同僚に在るであろうという認識をもって準備を進める必要があるということをセンター教員全員が共有した。また、3月には教員側はオンラインでの打ち合わせを開始しており、長時間のオンライン会議による身体への負担も経験知として共有された。履修学生の状況については、履修時間割の関係から長時間PCの前にいて身体的な負担を感じる可能性が高いこと、インターネットトラブルで、スムーズに参加できないときもあるということ、またオンライン授業の性質上、対面授業よりも全体的に課題が多くなることが予想されること、そのような条件に加えて、友だちに会えない、友だちができないといった不安や不満を持つ可能性が高いことから、いつも以上に、公平で思いやりのある対応、声がけの工夫をしていくようにした。

以上の方向性の確認のもと、どのような打ち合わせや工夫が行われたかについて、具体的な報告を行う。

### 3. オンライン授業関連の打ち合わせ

2020年度は、CJLEの全ての開講科目がオンライン授業となった。また、春学期には、授業開始日の繰り下げがあったため、通常14週で運営しているコースを12週で行うことになった。こ

れに伴い、対面授業時に実施していた授業活動や課題を、オンライン授業でも対応可能とし、14週の内容を12週で進めるようにするために、CJLEでは春学期開始前から検討を重ねていった。本節では、CJLEの打ち合わせの内容について、「科目コーディネーターによる打ち合わせ」、「オンライン担当者連絡会」、「PT関連の打ち合わせ、履修相談」の3つに分けて、述べていく。

### 3.1 科目コーディネーターによる打ち合わせ

2020年度春学期のオンライン授業化に向けて、科目コーディネーターは、毎回約2時間の打ち合わせを、学期開始前までの1か月弱の間に12回、学期開始後に3回、合計15回行った。学期開始前には、オンライン会議システムの情報収集、教材開発、オンライン授業におけるコースデザインを行い、学期開始後に、テスト関連の検討を行った。また、CJLEの事業として行っている「日本語相談室」<sup>1)</sup>のオンライン化も学期前に検討を進めた。

打ち合わせの初期では、各コーディネーターが担当科目のオンライン授業におけるコースデザインを行うために、大学から推薦されたオンライン会議システムと、Learning Management System (以下、LMS)の機能を学ぶことを重点的に行った。各ツールを使用した経験のある者が中心となり、未経験の者に対して、画面共有の方法、チャット機能の使用法、オンラインクイズの作成方法等を実践し、共に学んでいった。その後、日本語科目のクラス活動において、いつ、どの場面で、どの機能が活用できるのか、海外からアクセスする留学生も安定的に接続できるのかといった点を検証していった。その結果、CJLE開講科目では、オンライン会議システムはZoomとMeetを使用し、LMSは立教大学のBlackboard (以下、Bb)を使用することとした。また、補助的なツールとして、Googleドライブと「立教時間 (eポートフォリオシステム)」も活用することとした。

次に、オンライン授業に対応可能な教材の開発を進めていった。紙媒体で配付していたオリジナル教材のPDF化を行い、データで教材配付ができるように準備を進めた。また、来日が叶わず、海外からアクセスする学生が多数いたことから、市販教材を手に入れることが難しいことが予想され、さらに、対面授業以上に著作権への配慮が必要であることが明らかになったことから、市販教材を使用していた科目については、新規にオリジナル教材の開発を行うこととした。同時に、Web上で公開され、使用が許可されている日本語教材や生教材の情報共有も行った。

学期開始後は、学期前半のオンライン授業の振り返りと、中間・期末テストの実施方法について検討を進めた。テストは、授業内クイズですでに使用していたBbによるオンラインテストを採用することとし、科目特性に合わせた出題方法と実施方法を検討していった。また、学期中に数回、Bbにアクセスできない時間があったことから、トラブル時の対応として、GoogleドライブにPDF化したテスト問題を入れ、必要に応じて共有のためのURLを学生に知らせるといった実施方法を準備した。実際のテスト実施時には、多くの学生がBbのオンラインテストを受験することができたが、一部の学生において、Bbにアクセスができなかったり、日本語入力ができなかったりすることがあったため、Googleドライブ版のテストの使用もあった。オンライン上

のトラブル発生を事前に想定し、トラブル対応用のテスト実施方法を準備しておいたことにより、成績評価において、点数配分が大きい中間・期末テストを履修者全員に行うことができた。

CJLE では、教室外の日本語サポートの一つとして、「日本語相談室」を運営している。授業のオンライン化に伴い、「日本語相談室」も同様にオンラインで実施することとした。「日本語相談室」のオンライン化で検討課題として挙げたのは、入室する学生との連絡手段と、学生が持ち込む資料の提出方法についてである。「日本語相談室」が授業と異なる点は、学生の個別指導の場であり、持ち込む資料の相談が1回で完結することが多いことである。そのため、LMS を利用するのではなく個別にメールで対応していく方針をたて、オンライン会議システムの URL の連絡や、資料の事前提出はメールで対応することとした。

以上のように、春学期は、オンライン授業の体制を整えることを中心に検討していった。秋学期のオンライン授業体制に関しては、春学期の知見を活かして判断をすることができた。打ち合わせの場は、月に1、2回程度設け、オンライン授業の質がよりよいものとなるように、授業活動、トラブル対応等の事例を共有していった。

### 3.2 オンライン担当者連絡会

担当者連絡会では、科目コーディネーターから授業担当の兼任講師への科目内容の引継ぎと、先学期の振り返りを行っている。2020年度春学期向けの担当者連絡会は、3月初旬に対面で実施していたが、その後、全てのCJLE開講科目がオンライン授業となることが決定されたため、新しいコースデザインを授業担当の兼任講師に引き継ぐことを目的に、4月中旬にオンライン上で2回目の担当者連絡会を行った。オンライン担当者連絡会は、レベル、科目ごとに開催し、科目コーディネーターが自身の担当する科目を分担して、進めていった。打ち合わせの総数は、1枠1時間程度のものが18回である。

オンライン担当者連絡会では、「3.1科目コーディネーターによる打ち合わせ」の初期に検討したオンライン会議システムの機能の活用方法や、新規に開発した教材の引継ぎを中心に行った。また、オンライン会議システムを初めて使用する兼任講師には、この引継ぎの時間にオンライン会議システムの機能を実際に使用してもらうことにより、学期開始前にオンライン授業の練習の場を提供することができた。

秋学期に向けた担当者連絡会は、9月上旬にオンラインで実施した。すでにオンライン授業の経験を積んでいたことから、1枠の時間を短くしたが、春学期のオンライン授業の振り返りを細やかに行うために、1枠の参加人数を少なくするように設定した。打ち合わせの総数は、1枠30分程度のものが30回である。ここでは、科目コーディネーターから授業担当の兼任講師への科目の引継ぎのみでなく、兼任講師からオンライン授業の振り返りも多く行われ、授業内容の改善につながる話し合いが行われた。

### 3.3 学生の日本語レベル判定、履修相談

CJLE では、日本語のレベル別に授業を開講している。そのため、学期開始前に、CJLE 科目を履修する正規学部1年生、正規院生、特別外国人学生に対して、PTを実施している。春学期のPTは、例年3月下旬に実施しているが、今年度は3月下旬の時点で、キャンパスに集合し、対面でのテストを実施することが困難であったため、PTを実施せずにレベル判定を行うことにした。正規学部1年生は、本来J6、J7、J8の3つのレベルに判定をするが、全員J6レベル判定とし、初年次春学期の「大学生の日本語A/B」はJ6レベルで履修をさせるようにした（7節参照）。正規院生と特別外国人学生は、学生の日本語学習歴、大規模日本語試験の受験歴、送り出し校の日本語コースの内容等を参考にして、レベル判定を行い、暫定的なレベルを学生に通知することとした。レベル判定に関しては、毎回1～2時間程度の打ち合わせを5回行い、暫定的なレベル判定をした正規院生と特別外国人学生は、168名である。

春学期は、PT未実施のレベル判定であったため、その配慮として、正規院生と特別外国人学生には、自身のレベル判定結果について相談をする「履修相談」の場を提供することとした。まず、学期開始後にレベル判定結果通りのクラスを受講し、レベルの移動を希望する場合には「履修相談」の申し込みをするよう周知をした。その結果、19件の「履修相談」の申し込みがあり、10分程度の面談を個別に行った。この面談では、改めて日本語学習歴の聞き取りや、これからの日本語学習計画を聞くことにより、適切なレベル判定とクラス配置を行うことができた。

秋学期も対面でのPT実施が困難であったことから、春学期と同様にPTは実施せず、正規院生と特別外国人学生には「履修相談」の場を設けることとした。秋学期は、大学の方針として、新規の特別外国人学生の受け入れが激減したことにより、暫定的なレベル判定をしたのは21名であった。「履修相談」は9件あり、春学期と同様に10分程度の個別の面談の中で、学生から聞き取りを行い、クラスの再配置を行った。

## 4. 対面授業とオンライン授業の比較

表 1 は、対面授業とオンライン授業を比較したものである。CJLE で開講されているクラスで実施した方法を表 1-1、表 1-2 にまとめた。表 1-1 は教室環境の比較、表 1-2 は授業活動の比較である。

表 1-1 教室環境の比較

	対面授業	オンライン授業
場所	教室	オンライン会議システム（Zoom、Meet）
教室の様子	・コの字型 ・前向き型	・可能な限りカメラオン ・学生の都合によりカメラオフ
教室活動	教室での全体活動	メインルームでの全体活動
	席移動によるペア、グループワーク	ブレイクアウトルームによるペア、グループワーク
	教師の巡回指導【易】	教師の巡回指導【難】
	録音の利用（ICレコーダー等）	録音の利用（Zoom、Meetの機能）【多】
	録画の利用（ビデオカメラ等）	録画の利用（Zoom、Meetの機能）【多】
教師の質問に対する応答	口頭による応答 個別【易】 一斉【易】	口頭による応答 個別【易】 一斉【難】
	紙面への記述	チャット欄、Google フォームへの入力
授業中の教材提示、板書	OHC やスライドのスクリーンへの投影	教師の PC 画面の共有
	黒板、ホワイトボードへの板書	・ホワイトボード機能、タブレット PC への手書き入力 ・Word、PPT のノート欄、チャット欄等への文字入力

表 1-2 授業活動の比較

	対面授業	オンライン授業
教材	紙面の配付	電子ファイル（PDF）の配付
	・オリジナル教材 ・市販教材	・オリジナル教材 ・新規開発のオリジナル教材
	web上の日本語教材、生教材（ニュース等）【少】	web上の日本語教材、生教材（ニュース等）【多】
宿題	学生の解答	
	・紙面の宿題シートへの手書き【多】 ・電子ファイル（Word等）への文字入力【少】	・別ファイル（Word等）への文字入力 ・ノートへの手書き（写真を送付） ・PDFファイルの宿題シートへの文字入力、タッチペン書き込み ・Bbへの入力
	回収、返却	
	・教室での紙面の回収と返却【多】 ・Bb、メールでの電子ファイルの回収と返却【少】	Bb、メール、チャット欄での電子ファイルの回収と返却
	フィードバック	
・紙面への手書き ・電子ファイル（Word等）への文字入力	・電子ファイル（Word、PDF等）への文字入力、タッチペン書き込み ・電子ファイル（PDF等）を出力したものへの手書き→再PDF化	
クイズ	学生の解答、回収	
	・紙面のクイズシートへの手書き ・紙面の回収	・Bbによるオンラインクイズ ・画面共有での出題→チャット欄、Googleフォーム、電子ファイルへの解答の文字入力
	採点、返却	
紙面への手書き→返却	・Bbによる自動採点→Bb上での解答と点数の確認 ・電子ファイルへの採点→返却	
筆記テスト	テキスト類、辞書の閲覧	
	閲覧不可	閲覧可
	学生の解答	
紙面の解答用紙への手書き	・Bbによるオンラインテスト（選択式、文字入力） ・GoogleドライブのPDFファイル（ダウンロード不可）の共有→別ファイル（Word等）への解答、ノートへの手書きによる解答（写真を提出）	
会話テスト	教室での実施	・ブレイクアウトルームでの実施 ・個別の時間設定→メインルームでの実施
学生ボランティアの参加	対面授業時と比較してオンライン授業では、応募者数、及び実施回数が増加	
学生の出席状況	対面授業時と比較してオンライン授業では、遅刻と欠席が減少	



表 1-1、表 1-2 に示したように、対面授業時と同等の質を保つために、オンライン授業実施において、これまでとは異なるやり方で、様々な工夫がなされた。次節では、この変化による取り組みの実践をレベル別に報告する。

## 5. 初級、初中級レベル総合クラスにおけるオンライン授業

CJLE の初級、初中級レベルは、週 3 回生活日本語を学ぶ半期完結の J0 レベル、週 5 回体系的に日本語を学ぶ J1 ~ J3 レベル、同内容を週 3 回で進める J1S ~ J3S レベルの 7 つのクラスが展開されている。本節では、この 7 つのクラスのオンライン授業の活動について述べる。

### 5.1 授業の進め方

2020 年度の初級、初中級レベルのクラスは、短期留学の特別外国人学生の大幅な減少により、履修者が 1 名 ~ 6 名と、例年に比べてクラスサイズが小さかった。また、ほとんどの学生がカメラオンの状態でオンライン授業に参加していたこともあり、オンライン授業であっても、学生の様子を見ながら、指名して答えさせるといった授業の基本的な進め方は、対面授業時から大きな変更なく行うことができた。

オンライン授業におけるペアワーク、グループワークは、Zoom のブレイクアウトルームを使用して、教師が個室を回って様子を見に行くように進めることにより、学生同士の活動を取り入れることができた。一方で、クラス全体への問いかけに対して、学生が自由に発話するという場の提供は少なくなってしまう。教師の所感としては、オンライン授業では、対面授業に比べて、複数名が同時に発話した際に対応しづらい印象がある。そのため、オンライン授業では、次に発話する学生が誰であるのかが明確となるように、毎回、指名して答えさせるように心がけた。

授業の進行は、対面授業時よりもゆっくり進めるようにした。オンライン授業を進める中で、学生の様子から、教材や学習項目を理解するまでに、時間がかかるように思われたためである。そのため、教材を読む時間を長めに取る、問いに対する理解の時間を取る、質問の時間をきちんと設けるといったことを心がけ、そのように実施するようになってからは理解が深まっていったと思われる。

### 5.2 教材、宿題、クイズ、テスト

CJLE の初級、初中級レベルでは、オリジナル教材を使用しており、レベルごとに、文法、読解、作文、語彙リスト、宿題シート（語彙の穴埋め、短文作成、文法）、クイズシートがある。オンライン授業への対応として、テキスト類と宿題シートは、PDF 化し Bb を使って学生に配付するようにした。クイズシートは、Bb のテスト機能を用いて、オンライン上でクイズが実施できるようにした。

テキスト類と宿題シートは、対面授業では学期開始時に全 10 課分配付しているが、オンライ

ン授業では、履修者の確定までに時間を要したことと、著作権への配慮から、PDF化した教材を1課ごとのファイルに分け、使用する回の1週間前から期限をつけてBbに掲載した。学生のPDF教材の使用方法は、その学生の電子媒体の使用状況によって異なり、授業に参加しながら同じPCを使って閲覧する者、授業参加用のPCとは別にタブレットPCを用いてテキストを閲覧したり、書き込みをしたりする者、紙に出力して閲覧と書き込みをする者、主に教師が授業中に共有した画面で閲覧する者等、様々であった。

クイズは、Bbのテスト機能を使用して、オンライン上でクイズが受験できるようにした。問題内容は、学生の日本語タイピング入力環境とスキルが整っていないことを想定し、全て選択式となるように改定した。選択式の問題は、Bbの機能によって、学生の解答後に自動採点が行われるため、教師の負担軽減につながった。紙面でクイズを実施していたときには、授業の冒頭にクイズを実施し、授業後に採点を行っていた。そして、次の回の授業担当者が返却時にフィードバック（以下、FB）をすることが多かった。クイズのオンライン化に伴い、実施のタイミングは授業担当者の裁量とし、その日の授業活動や学生の様子に合わせて、柔軟に対応できるようにした。オンラインクイズの利点は、クイズ結果を実施後すぐに知ることができることである。そのため、FBをクイズ実施の直後に行ったり、確認をしたい項目をその日の授業活動に取り入れられることが可能となった。このことから、オンラインクイズは、オンライン授業の対応のみでなく、対面授業であっても活用できる可能性を見出すことができた。一方で、答案とFBの結果が学生の手元に残りづらいという点と、監督のいない状況下での受験環境の公平性という点で課題が残った。今後は、オンラインクイズと紙面でのクイズの双方の利点を考慮しながら、目的に合ったものを授業に取り入れていきたい。

テストは、前述したとおり、クイズと同様にBbのテスト機能を用いてオンライン化し、Bbの不具合があったときのためにGoogleドライブにも同様の問題を準備した。テストでは、選択式の問題の他に記述問題も出題することにしたため、日本語のタイピング入力ができるように指導し（5.3参照）、事前に練習ができるようにBbにテストの類似問題を掲載するようにした。テストは、成績評価において配点が大きく、また次学期以降の学生の日本語学習レベルに関わるものであるため、オンラインクイズの課題として挙がっていた受験環境を整え、公平性をより保てる方法を検討する必要があった。検討の結果、対面授業のテスト実施方法から2点の変更を行うことにした。1点目は、オンライン会議システムへの接続についてである。対面授業時には、必ず教室に来て、受験することを求めていたが、オンライン授業においては、テスト時間中にオンライン会議システムに接続しつづけるかどうかを、クラスサイズや学生のインターネット環境によって、柔軟に対応できるようにした。オンライン会議システムに接続したままの場合は、マイクをミュート状態にしたり、Zoomのブレイクアウトルームで個室の環境を作ったりする等した。オンライン会議システムに接続し続けることが難しい学生には、テストのアナウンスを教師から受けた後に退室して、Bbにアクセスし、テスト終了後に再度入室してテスト終了の報告をさせるようにした。どちらの方法であっても、教師はオンライン会議システムに待機し、質問やトラ

ブルに対して即時に対応できるようにした。2点目は、テキスト類の持ち込みについてである。対面授業時には、テキストと辞書の持ち込みは不可としていたが、オンラインテストにおいては、公平性を保つために、テキストと辞書の閲覧を許可するようにした。以上の対応により、静寂な環境でのテスト受験と、テキスト類の閲覧の条件が揃ったことから、一定の公平性は保てたものと考えられる。

### 5.3 表記に関わる指導

対面授業とオンライン授業で、大きく変わったのは、表記に関わる指導である。対面授業時に紙媒体に手書きをさせていた課題の多くを、オンライン授業の実施に伴い、電子ファイルで提出するように変更したため、学生の手書き文書を教師が添削する機会が減少してしまった。特に、初級レベルの学生は、拗音、長音等の表記法のみでなく、ひらがな、カタカナ、漢字の字形を整えることも学習目標としているため、学生が手書きをする機会が減ってしまったことは、表記の指導において、課題が残った。一方で、対面授業時に初級、初中級レベルではほとんど採用していなかった日本語の電子ファイル作成の機会が増えたことにより、日本語のタイピング入力のスキルが向上したという利点もあった。日本語のタイピング入力は、課題作成のみでなく、授業活動においても取り入れられ、例えば、文法項目導入時の短文作成や、聴解練習時のディクテーション等において、オンライン会議システムのチャット欄に解答を入力させるといった活動を多くのクラスで行った。多くの学生は、自国からPCを持参しており、日本語入力ソフトのインストールから必要であり、初めて日本語入力をした学生も少なくなかった。日本語のタイピング入力の環境が整い、その方法を早い段階から習得したことは、将来的な日本語学習の継続にもつながることであると考えられる。

### 5.4 ボランティア学生の参加

CJLE 開講科目では、クラスにボランティア学生をゲストに招いて活動をすることがある。毎回、クラスサイズに合わせて、希望人数を出し、募集しているが、ボランティア学生の都合と合わずに、希望人数に満たないこともあった。オンライン授業になったことにより、通学、キャンパス移動、外出の時間が減り、ボランティア学生の都合が合いやすくなったため、一つの募集に対して、多くのボランティア学生が応募してくれるようになった。また、教師以外の日本語話者との活動は、日本語学習中の学生にとって、多くの学びがあることから、コースデザインをする際に、通常よりも多くボランティア学生を招く回を作ったクラスもあった。前述のとおり、CJLE 開講科目を履修する学生は、来日が叶わず、自国からアクセスしている者も多い。対面での交流が難しい中、オンライン上で立教の学生と知り合い、活動ができたことは、留学生、ボランティア学生の双方にとって、貴重な時間であったと考えられる。

## 6. 中級、上級レベルスキル別クラスにおけるオンライン授業の取り組み

CJLEの中級、上級のスキル別クラスには、J4～J7の4つのレベルがある。初級とは異なり、中級以上は、文法、読解、作文、聴解・会話のスキル別にレベル判定を行っており、どの科目を履修するかは学生自身が決定することができる。本節では、中級、上級のスキル別クラスの取り組みについて述べていくが、J4に関しては初級項目を復習しながら中級項目を学んでいく特性があり、学生のレベル判定において4つのスキルともJ4判定になることが多いことから、オンライン授業の取り組みは前節で述べた初級、初中級レベル総合クラスの運営に近い進め方を導入した。そのため、本節では、J4は取り上げず、J5以上の中級、上級スキル別クラスの取り組みを述べることにする。

### 6.1 J5～J7 文型・文法

文型・文法クラスにおけるオンライン授業の取り組みとしては、主にBbを活用したオンラインテストの実施とZoomのブレイクアウトルームを活用したグループ活動の実施が挙げられる。

まず、Bbを活用したオンラインテストの実施について述べる。J5～J7の文型・文法クラスでは、対面授業においてもオリジナル教材を使用していた。そのため、授業形態の転換に伴う最も大きな変更点は教材や課題の提示方法とテストの実施方法にある。オンライン授業となり、教材の配付、課題の提示及びFB、テストの実施等、全ての活動をBb上で行った。また、中間及び期末テストだけでなく、テスト前の練習問題もBbを活用した。オンラインテストの受験経験が少なく、実施方法やインターネット環境が不安定なことによるトラブルに関して不安を抱いている学生が多かったため、練習問題は複数回受験できるように設定した。学生は、自身の復習状況や学習スタイル等に合わせて、テストの準備を行うことができたようである。

次に、Zoomのブレイクアウトルームを活用したグループ活動の実施について述べる。文型・文法の対面授業では、教師主導型から協働型・双方向型への転換を志向し、グループ活動の実施等、多くの工夫がなされてきた。オンライン授業においても、Zoomのブレイクアウトルームを用いることで、対面授業と変わりなく、ペアもしくはグループ活動を行うことができた。学生は、他者に文型・文法の意味や機能を説明したり、他者の話を聞いたりする中で、自身の理解を再確認するだけでなく、オンライン授業への移行による学習上の困難点や悩み等も共有することができたようである。

以上、文型・文法クラスにおけるオンライン授業の取り組みが学生にもたらした利点を述べた。しかし、一方で課題もある。まず、1点目の取り組みに関しては、Bbの使用方法が課題として残った。履修者の中にはBbの教材提示に期限があることがわからず、ダウンロードをしていない学生もいたようである。また、課題の確認方法や提出方法を把握しておらず、課題について話し合うグループ活動に参加できない学生もいたようである。以上のような課題は、Bbの利用方法やクラスにおけるルール等を事前に明確に伝えることで改善できると思われる。また、2点目

の取り組みに関しては、履修者全員に対する平等な機会の提供が課題として残った。全体での活動には積極的に参加するものの、グループ活動ではマイクをミュートにして消極的な参加態度をとる学生もいたようである。そのため、履修者全員に対して平等な学びの機会が提供されていたとは言い難い。オンライン授業において、特に J6 や J7 のように履修者が 20 人を超える場合、教師が学生一人ひとりの状況を把握することは難しいというのが一つの原因であるといえる。この点に関しては、今後更なる検討が必要である。

## 6.2 J5～J7 読解

オンライン授業にあたり、読解では J5 の読み教材を新たに開発した。J5 はこれまで一部、市販の読解教材の利用もあったが、2020 年度は全て生教材に差し替え、著作権に配慮して web 上で読める読み物を中心に扱った。J6 と J7 は従来から生教材を利用していたため、オンライン授業に伴う教材自体の変更は行っていない。

教材は Word または PDF を Zoom のチャットで送信して共有したり、Bb で共有したりした。Web 上に記事がある場合には URL のリンクを貼り、web 上で直接読む形式とした。また、大学図書館のデータベースで新聞記事を読むことができるため、学外からアクセスするための設定を伝えて、新聞記事は各自で検索できるようにした。通常学期も「Reading Tutor」等のオンラインツールを紹介しているが、2020 年度はオンライン授業となり、オンラインツールも活用される機会が増えたと思われる。

宿題は、どのレベルも予習形式で事前に読み物を読んでワークシートに答えを書いてこさせることが多い。通常学期、このタイプの宿題は、授業開始時に机間巡視をして宿題をやってきたかどうかを確認し、授業の中で答え合わせをした際、各自で修正させている。その他、読み物を読んだ後のコメントを書かせたり、要約をさせたりする課題の場合には、回収して添削をしている。J7 では大学生の図書館のデータベース等を用い、資料を探して持ってこさせ、内容を共有するという宿題もある。

2020 年度春学期は、これまで回収せずに机間巡視で授業開始時に確認していたタイプの宿題の場合、担当講師がその確認方法を選択できるようにした。通常学期も添削している記述式の宿題については、Bb 等に提出させ、添削して返却した。

活動の方法だが、筆者が担当した J5 読解の授業では、ほぼ全ての学生がカメラをオンにした状態でクラスに参加した。Zoom のブレイクアウトルームを使い、小グループで宿題の読み物を音読、答え合わせ、話し合いをさせたあとで、クラス全員で答えの確認をしたり話し合いの内容を報告させたりした。宿題の読み物を使った活動が終了した後は、その場で新しい読み物を配付し、カメラとマイクをオフにした状態で各自読ませ、その内容を確認するという流れで進めた。各自が読み物を読んでいる間は、ブレイクアウトルームを一人一部屋に設定し、教師が個室を訪問して学生と個別に話し、難易度を確認したり、困ったことがないか等を確認したりした。また、例年、2～3 種類の読み物を分担して読んでくることを宿題とし、その内容をお互いに説明し合

う活動をしているが、ブレイクアウトルームを使うことで同様の活動を再現することができた。積極的に発言する学生が多かったこともあり、小グループの活動でもクラス全員での活動でも活発な交流があった。

J5とJ6では、通常学期に紙面で漢字語彙クイズを実施しているが、2020年度は秋学期から両クラスとも画面共有で問題を提示し、クイズを実施した。

期末テストはBbのテスト機能を用いて実施した。形式に慣れさせるため、事前に同じ機能を用いて読解の問題を解く練習をした。また、読み物は画像としてアップロードし、文字をコピーできないようにした。

2020年春学期に筆者が授業を担当した読解クラスは、学習意欲があり、クラスメートとも積極的にコミュニケーションを取ろうとする学生が多かったため、通常授業と同様の活動を行うことができ、学生同士の交流も活発だった。しかし、消極的であり発言しつけない学生が大半を占めるクラスもあったという報告を受けている。オンライン授業でブレイクアウトルームに分かれて活動する場合、教師は一度に全体を見渡すことができないため、運営には工夫が必要であり、課題として残った。

### 6.3 J5～J7 作文

2020年度春学期はZoomによるオンライン授業を12回行った。授業では、PDF化したオリジナル教材（J5、J6、J7）及び立教大学大学教育・開発センターが刊行している「Master of Writing」（J6、J7）を用いた。テキストは授業前にBbで配信した。授業の練習の際はZoomのチャット機能やGoogleのツールを用い、各自作った文を入力させ、その場でFBを行った。また、テーマ探しや作文の内容に対するアドバイスではブレイクアウトルームを用い、ペアやグループで意見交換を行った。作文はWordで作成し、基本的にBbで提出を受け付けた。作文のFBは、クラス全体へは口頭で指摘し、個人に対してはブレイクアウトルームで1対1で話し合う場を設けたり、Bbやメールで行ったりした。

作文クラスでよかった点は、資料の掲示の仕方である。小さい文字での画面共有が可能であったことから、サンプルを見せる際に、作文の一部ではなく、全体を見せて、どの部分か確認し、画面を拡大してその詳細に目を向けさせることができた。

また、短作文の練習では、Zoomのチャット機能やGoogleのツールを使って、全員に入力させ提出させた。その結果、学生がどの程度理解しているのかも瞬時に把握することが可能になった。また、タイプで早く入力できることもあって、学生たちは対面授業時より積極的に参加しているように思われた。従来の机間巡視の際は時間内に全員の作文をその場で見ることができず、FBしてもらえない学生もいたが、オンラインではそのような場合もデータがあることから授業後にすぐにメール等でのFBが可能になった。また、データとしてストックされるので学生が共通して困難だと感じている点を見つけることができ、それについて指導することができた。

また提出された作文のFBでは、学生1人1人にブレイクアウトルームを用意し教師と1対1

でFBを行った。その結果、周りを気にすることなく、学生から自発的な質問を受けたり、学生が納得するまで説明したりすることができた。

作文の場合、オリジナル教材であるため、著作権に関する問題もなく、準備もしやすかった。作文テストは、テキスト類と辞書を持ち込み可とし、時間制限を設けて実施したが、作文に関しては文法や読解テストに比べ、内容を重視するため、本人の実力を見ることができたのではないかとと思われる。

以上のように、作文のクラス活動は、オンラインであっても、全般的に通常の作文授業と変わらない授業を実施することができた。

一方、課題もある。作文クラスに限らず中級、上級レベルの学生の複数名は母国からインターネットにアクセスしている者もあり、ほぼカメラオフの状態だった。指名すれば答えるので、話は聞いていたのだと思うが、理解したかどうか判断が難しかった。カメラをオンにすることはインターネットの環境や、自室がビデオに映ることを避けたい学生に対する配慮により強制することはできないが、声だけで判断することの難しさを感じた。カメラがオフになっていることも関係するが、ブレイクアウトルームを使ってもペアワークも相手の顔が見えないペアでは、話が盛り上がり上がらないこともあったようである。

J5～J7作文クラスのもう一つの課題は教材のダウンロードを期日までにしておかない者がいることである。作文の教材は読み物を含んでいるため、予習が重要である。事前に読み物を読んでおかないと、授業時についていけない者もいる。教材の配信日については留意しているが、学生にリマインドする必要がある。

J6、J7に関しては、タイプ入力に問題はなかったが、J5の一部の学生は日本語入力のソフトを入れるところから開始しなければならず、また、原稿用紙へのタイプ入力ができない者もあり、J5作文は軌道に乗るまで少し時間がかかった。しかしながら、全員タイプできるようになってからは問題なく対応できている。初めてPCで日本語入力する者がいることを念頭に置き、クラス開始時に案内する必要がある。

## 6.4 J5～J7 聴解・会話

J5～J7聴解・会話において共通した授業の取り組みは主に3点で、学生ボランティアとの活動、新規教材の開発、オンライン上でのクイズ・テストの実施である。

1点目の学生ボランティアとの活動は、対面授業でも実施していたが、オンライン授業では活動の回数を増やし、積極的に取り入れた。会話能力の育成は、会話参加者のインターアクションが重要となる。しかしながら、オンライン授業となったことで、学生同士、自由に会話する機会が減少したため、クラスメートとの会話活動のみならず、学生ボランティアとの活動も積極的に取り入れることにした。従来実施していたロールプレイの会話練習やディスカッションの他、インタビュー調査やプレゼンテーションの発表、発表準備のサポート等でも学生ボランティアに協力してもらい、ブレイクアウトルームによるペア、グループワークを実施した。活動中は、各ペ

ア、グループの様子を見て回ったが、全体のやりとりを把握することは難しかった。そこで、学生ボランティアに許可を得て、各学生が会話を録音し、録音ファイルを Bb に提出してもらうことを適宜実施した。宿題として自身の録音で振り返りをする活動を課し、教師は、その録音をもとに評価、FB を行った。学生ボランティアもオンライン参加で、参加しやすい環境となったこともあり、多数の応募があった。また、ブレイクアウトルームによるペア、グループの組み換えが容易になり、学生全員が学生ボランティアとまとまった時間、インターアクションをもつことができ、授業が活性化するとともに、学生の満足度が高い活動となった。

2 点目の取り組みは、新規教材の開発である。J5 はオリジナル教材、J6、J7 は従来の教材の他、映像教材等の生教材を適宜用いた。J5 のオリジナル教材は、カジュアルな場面と改まった場面のオリジナル会話を作成、収録をし、音声教材とワークシート、自主学習で活用できる自習用音声を作成した。J6、J7 の映像教材は、新型コロナ関連の動画や時事ニュースを取り扱ったため、学生は関心を持って取り組んでいたようだ。

3 点目は、オンライン上でのクイズ・テストの実施である。クイズは、主にディクテーションであるが、プライベートチャット機能を活用し、タイプして教員のみで解答を送る形式を取った。はじめはタイピングに苦勞する学生もいたが、徐々に慣れていき、「タイピングが上手になった」という感想が得られた。テストは、他の科目と同様に Bb を用い、ダウンロード不可の音声を視聴しながら問題を解くことが可能となった。インターネット環境や PC の不具合等の対応のために、Google ドライブに問題用紙と解答用紙も準備した。このように、Zoom の機能や Bb のツールを活用し、オンライン上でのクイズやテストが実現した。これにより、教師の採点の簡素化も図ることができたこともよかった点である。

以上、聴解・会話クラスの主な取り組み 3 点について述べた。オンライン授業となり、対面授業とは多少異なる方法で授業を展開したが、一定の成果や学生の満足、達成感が得られたように感じる。また、オンライン授業の独自の利点もあったように思われる。しかしながら、コミュニケーションは、非言語行動等、対面でしか伝わらないコミュニケーション要素があるため、オンライン上での聴解や会話は特殊となる場合がある。実際に、カメラをオフにした学生とのコミュニケーションは、相手の表情や反応がわからず、話すタイミングや理解の確認が難しいことがあった。そのため、学生の学習環境に配慮した教材開発や、オンライン上で実現できるコミュニケーション活動について更なる検討が必要である。

## 7. 正規学部留学生の初年次日本語科目「大学生の日本語」

正規学部留学生の 1 年生は「大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得」を目指す「大学生の日本語」が必修科目となっており、春学期に A と B、秋学期に C と D を履修することになっている。「大学生の日本語 A/C」は口頭発表、「大学生の日本語 B/D」は読解、レジュメ、リアクションペーパー、レポートを実践的に学ぶ科目である。本節では、2020 年度



春学期の取り組みについて報告する。

この科目は異なる日本語レベルの正規学部留学生が一つの教室で共に学ぶ科目である。例年は3月にPTを実施してJ6、J7、J8という3つのレベルに判定し、クラスではそれぞれのレベルに合った手当てと成績評価をしている。具体的には、J8の学生は漢字に振り仮名のない資料を読むが、J6の学生は振り仮名の振られた資料を語彙リストも参照しながら読むというような違いがあり、課題の成績評価においても同じ「S」評価を得るにはJ8の学生はJ6、J7の学生より高度な日本語が要求される。しかし、2020年度はPTが実施できなかったため、全学生を便宜的にJ6とし、学生たちが不利益を被らないように配慮した。

2020年度春学期は大学の方針にもとづき、通常の14週から12週に短縮され、他の日本語科目と同様にこの科目もオンラインでの双方向の演習形式をとることになった。そこで、本科目の特性を考慮して①この科目を通して友人・横のつながりを作れるようにする、②大学生活とオンライン授業に慣れると同時に、課題にしっかり取り組めるよう、通常学期ほど詰め込まない、③「大学生の日本語 A/B」はそれぞれ6クラスで同じ内容の授業を展開するが、担当講師がオンライン授業にスムーズに移行できるよう授業の進め方は複数の選択肢を提示するという方針のもと、授業を運営することにした（丸山・数野、2020）。

まず、①この科目を通して友人・横のつながりを作れるようにするという方針には、以下ののような背景がある。緊急事態宣言が出るという、経験したことのない状況で、誰もがストレスを抱えることが容易に想像された。特にこの科目の履修者は入学したばかりで、慣れない日本での一人暮らしをする留学生である。また、通常学期であれば授業時間の前後にクラスメートと自由に交流することもできるが、オンライン授業の場合は自由な会話が難しく、友人が作りにくい環境であることが予想された。2年生以上であればすでに大学に友人がいるため、授業外でSNS等を用いて交流することができるが、まだ大学に友人のいない新生はそれも難しい。横のつながりがあれば、わからないことがあった時に気軽に尋ねることができるが、横のつながりがなければ、わからないことをそのままにしてしまう学生も出てくる可能性がある。

そこで、オンライン授業にスムーズに移行できるよう、授業では学生同士が話す機会を積極的に作ることにした。Zoomを利用して授業をする場合にはブレイクアウトルームでグループワークやペアワークを取り入れ、少人数で学生同士が話せる環境を設けた。Meetで授業をする講師もいたが、そのクラスは学生数が少なかったため、全員でディスカッションをする等して、双方向のコミュニケーションする機会を確保した。

次に、②大学生活とオンライン授業に慣れると同時に、課題にしっかり取り組めるように、通常学期ほど詰め込まないという方針について説明する。この科目の履修生は海外からの新生のため、通常学期であっても日本の大学での生活や授業に慣れる必要がある。しかし、今回はそれに加えてオンライン授業にも慣れる必要があった。先行して授業が始まっていた国内外の大学の様子からは、オンライン授業の場合、どの科目もレポート課題が通常よりも多くなるということが予想された。筆者らは学期開始前の3、4月にZoomでミーティングをしたりワークショップ

に参加したりしたが、オンライン会議に慣れていないこともあり、普段より体力的にも精神的にも疲労を感じた。学生の場合には、きちんとした机や椅子のない環境で授業を受ける場合も多く、一層疲れると思われた。通常学期、この科目は授業時間外の課題がかなり多いが、オンライン授業の場合には授業時間外にあまり多くの課題を課すのは負担が大きすぎる。普段よりも2週短い12週でこれまでの課題を全てこなすのは非常に難しい。

そこで、到達目標は維持したまま、オンライン授業でも学生たちが無理なく課題に取り組めるよう、授業外の課題を通常学期より少なく設定することにした。例えば、「大学生の日本語 A」のクラスでは例年は学期に4つのテーマで発表をしているが、3つに減らした。「大学生の日本語 B」のクラスの例年の主な課題は、読解の内容把握のワークシート2つ、レジュメ2つ、レポート2つとしているが、このうちレポートは2つから1つに減らした。また、授業時間外の負担が大きくなりすぎないように、授業時間内にも課題準備の時間を設けるようにした。

最後に、③「大学生の日本語 A/B」はそれぞれ6クラスで同じ内容の授業を展開するが、担当講師がオンライン授業にスムーズに移行できるよう授業の進め方は複数の選択肢を提示するという方針について説明する。この科目はGLAPを除く全学部、初年次の正規留学生が対象となる。そのため、6クラスで共通の教材、クイズを用いて、同じスケジュール、評価基準で授業が展開されている。しかし、春学期開始時点では担当講師の環境もITスキルも様々であったため、授業の進め方については複数の選択肢を提示することにした。

例えば、「大学生の日本語 B」のクラスでは、担当した資料のレジュメの発表をする際、通常学期はペアで発表し合う時間を設けている。しかし、春学期はZoomのブレイクアウトルームが使える場合にはペアで発表し合う時間を設け、教員が各ルームを回って様子を見る、それが難しい場合には、学生に個別作業でレジュメの録音をして音声を提出させ、代表の学生に発表させるというような進め方である。どちらの場合もレジュメ自体はBbで回収して添削・評価するが、発表の活動の進め方は担当講師が選択できるようにした。ディスカッションについても、ブレイクアウトルームでのグループ・ディスカッションが難しい場合は、クラス全体で一人ずつ発言させる、Googleフォームにコメントを書いて提出させる、Wordファイルにコメントを書いてBbに提出させる等、複数の選択肢を示すことにより、担当講師に過度な負担がかからないように留意した。

以上の3つの方針を立て、2020年度春学期は通常より少ない12週でオンラインの双方向授業を行った。方針①については、ある程度達成されたが、課題も残った。筆者が担当した春学期の「大学生の日本語 A」の最終授業で一人ずつ感想を述べてもらったところ、このクラスは少人数で留学生同士なのでオンラインでも発言がしやすかった、日本語のクラスはブレイクアウトルームでクラスメートとたくさん話す機会があったのでよかったという肯定的な意見が多かった。一方で、オンライン授業では友だちが作りづらく、一人暮らしでずっと狭い部屋にいたため孤独であった、オンラインでも仲良くなったがやはり直接会って共通の体験をすることで深まる絆があるので残念だったという声もあった。

方針②について、例えば春学期の「大学生の日本語 A」の全学部の履修者の出席率（一度も出席していない学生を除く）は 95%と非常に良かった。課題についても、各クラスの提出状況はよかったと報告を受けている。また、学生の声を聞く限り、このクラスで学んだことを生かして、他のクラスでもレポート作成ができたようである。

方針③についてだが、担当講師間で授業の進め方を報告し合い、うまくいった点や改善点を共有した。その結果、これまでに使ったことのないツールも試していく講師が増え、様々な機能が効果的に使えるようになった。

上述の、オンラインでは友人が作りにくい、共通の体験で絆を深めることはできないという声を踏まえ、秋学期の「大学生の日本語 C」では新たにグループ発表を取り入れることにした。オンライン上でグループ発表のプロジェクトを運営する場合、担当講師にも IT スキルが必要となるが、春学期の間に講師もオンライン授業に十分慣れていたため、グループ発表を取り入れることに対して担当講師全員から賛同を得ることができた。そこで、秋学期は授業時間内に発表準備の時間を設け、Google スライドを利用し、グループでスライドを作成して発表するという活動を取り入れ、オンラインでの協働学習を促した。

## 8. おわりに

2020 年度には、新型コロナのパンデミックという未曾有の事態に見舞われ、大学教育の現場においても、多くの側面に対応が迫られ、柔軟さと底力を試される年となったといえるだろう。CJLE では、この事態において、大学との縦の連携、センター内での横の連携に重きを置き、これまで見てきたように、打ち合わせを重ね、教材の開発、クラス運営の方法、クイズやテストの実施方法等、予見出来得る限りの事態を想定しながら、様々な工夫、試みを行い、プログラム運営に注力してきた。突発的に起こった世界規模の変化の中で、迅速かつ細やかな対応と配慮を心掛け、また、プログラム全体での足並みを揃え、統一の取れたチームとしてこの事態を乗り切っていくと取り組んでいる。その結果、平時に行ってきた教育水準を保ちつつ、新たな局面での試みにおいて、高い成果を収めることができたと自負している。

今後、CJLE として取り組んでいくべきことは、この事態を一過性のものとして捉えるのではなく、想定外の事態においてもセンターとして対応していける地盤を固めていくこと、これを発展の機と捉え、従来の対面授業の方式と合わせ、長期的にオンライン授業への対応を続けていくこと、そして、今回手にした様々なノウハウを今後も活用していける形で整理していくことである。課題点をしっかりと抽出、把握し、それを踏まえた上で、躊躇することなく新しい形態へと変化していかなければならない。

最後に、上述のような成果は、センターとしての取り組みのみならず、実際に授業に立ってくださった全ての教員、様々な事態に迅速に対応してくださった事務局、そして、苦しい状況の中でも高い意欲を持ち続けて、笑顔で授業に参加し、学んでくれた学生たちの協力なしには成しえ

なかったものである。

立教大学では今後、新しいタイプの留学生受け入れ等、より多くの人材をグローバル社会に輩出していくための新しいプログラムを予定している。CJLE では、様々な背景を持つ学生たちに適した学習環境を整えるべく、教材開発やプログラム開発を進めている。ますます多様化する学生のニーズに応えていける CJLE でありつづけるために、今回の「学び」を最大限に活用し、学生に寄り添えるセンターとして益々成長していきたい。

#### 謝辞

日本語科目のオンライン授業は、同僚の兼任講師の先生方の多大なご尽力のもと実施することができました。事務局、メディアセンター、教務課等関係部署の対応に支えられて授業が展開していることをあらためて認識する機会でもありました。関係の皆様から心からお礼申し上げます。

#### 注

- 1) 立教大学日本語教育センター「日本語相談室」<https://cjle.rikkyo.ac.jp/supportdesk> (2020年12月29日アクセス)

#### 参考文献

- 在香港日本国総領事 (2020) 「新型コロナウイルス感染症に関する新たな入国制限 (重要なお知らせ) (2020年3月19日)」  
[https://www.hk.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/important\\_notice7.html](https://www.hk.emb-japan.go.jp/itpr_ja/important_notice7.html) (2020年12月29日アクセス)
- 丸山千歌・数野恵理 (2020) 「パンデミック中の日本語オンライン授業の方針・方法・評価——立教大学の取り組み——」、2020年度インドネシア日本語中学校・高校日本語教師会オンライン国際セミナー・ワークショップ、2020年8月8日。
- 立教大学 (2020a) 「【まとめ】新型コロナウイルス感染症への対応について (12月21日更新) <https://www.rikkyo.ac.jp/covid19/faq/> (2020年12月29日アクセス)
- 立教大学 (2020b) 「立教大学オンライン授業マニュアルサイト」<https://helpdesk.rikkyo.ac.jp/> (2020年12月29日アクセス)